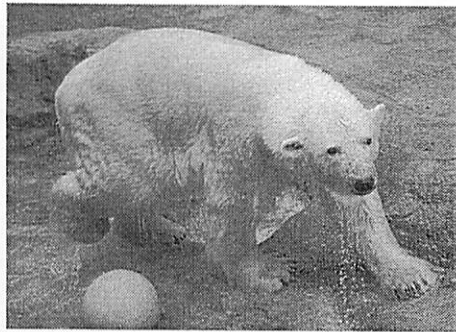




もうかれこれ十数回引越しをし、仕事を含めて海外には二十カ国以上行きました。どれも思い出深く、留学の初日にさまざまな人種の人たちでにぎわうロス

しかし、旭川の第一印象

旭川の底力



はじめての旭山動物園。野生の迫りに感動！

は格別でした。空港着陸の際に目にしたのは、大雪山や石狩川などの雄大な大自然と、整然とした田畑が広がる中に忽然と現れる近代的な美しい街並みとが織りなす見事な光景でした。その日食べた旭川ラーメンと新鮮な刺身にも大いに感動

しました。けれども翌白ある人から、「自然も食も、ここにはいくらでもいいものがあるから、感動するのはまだ早い」と指摘されました。実際その通りでした。

食のレベルの高さは言うまでもなく、自転車で行ける範囲にある常磐公園、上川神社と神楽岡公園、石狩川や忠別川の川辺、旭橋と大雪山、三浦綾子記念文学館と見本林、北鎮記念館などの内容の濃さも特筆ものでした。近郊の旭山動物園、富良野、美瑛の素晴らしい景観に違わず、ぬものでした。ここは行くべきだよ」と奨められた見所のリストは積み上がる一方です。当地には、食も自然

も文化もあって、道民所得だけでは測れない豊かさがあります。それだから、昨年五月に実施された旭川市民アンケートで、実に四人に三人以上が「旭川市は暮らしやすいまちだ」と答えたのでしよう。実際、旭川の転勤経験者に当地の感想を尋ねると、異口同音に「住んでみるととてもよい町で、転勤前のイメージとのギャップが大きい」という答えが返ってきます。

実は、このギャップこそが、これからの旭川の伸び代であると思います。認知度を向上させていく中で、観光や食や医療といった当地の比較優位産業を有機的に結びつけ、新しい需要を生み出すアイデアが浮かんでくるかも知れません。動物たちの自然で生き生きとした姿を見せる「行動展示」で奇跡の復活を遂げた旭山動物園のように、うまく潜在力を引き出して成功した

荒木光二郎(あらかきこうじろう) 一九六〇年(昭和三十五年)愛媛県生まれ。阪大法学部を卒業し、八三年同五十八年)日本銀行に入行。米田エール大学留学、格付機関(R&I)設立当初のメンバーの一人。黎明期の仕組み価格付け等に取組み、出向、松本支店次長、調査統計局企画役などを経て、一〇年平成二十二年)から旭川事務所長。趣味は旅行、写真、音楽鑑賞、翻訳(ランタースの犬等)。

実績もあります。ギャップを埋めるためにはどうするべきか、皆がそれぞれの立場から真剣に考え行動に移すことができれば、「北の王都」旭川は、更なる発展を遂げることができるとは思いませんか。
日本銀行旭川事務所長 (毎月第4週に掲載します)